

保育園における幼児の関係性に関する研究-1:

子どもの発達と保育士の関わり

○松田茂樹（第一生命経済研究所）、坂本有芳（お茶の水女子大学大学院人間文化研究科）、山田恵美（千葉大学大学院自然科学研究科）、土谷みち子（日立家庭教育研究所）、汐見和恵（立教大学社会福祉研究所）

1. 研究目的

保育園において保育士の日常的な保育姿勢が、子どもの発達に与える影響について研究した。ここで分析した子どもの発達とは、子どもの自己制御能力と探索行動・言語・生活面の力の発達である。これらは、子どもが他者と関わる力である。子どもの発達は、大人からの働きかけや子ども同士の接触、あるいはそれ以外の社会環境などのさまざまな影響によって左右されるものである。中でも、日中の多くの時間を保育園で過ごす子どもにとっては、保育士の子どもたちへの働きかけや保育の姿勢がその子の発達に与える影響は大きいと考えられる。どのような保育姿勢が、子どものこれらの力の伸長に影響を与えるかということを定量調査データをもとに分析する。

2. 方法

(1) データ

分析に使用したデータは、独立行政法人福祉医療機構の平成15年度子育て支援基金を受けて、(社)全国私立保育園連盟が関東1都6県にある私立保育園と公立保育園の計89園を対象に平成15年7月末から8月末にかけて実施したアンケート調査の個票データである。調査は、当該地域の自治体の中から系統抽出で25の市区町村を抽出し、それらの地域にある保育園のうち調査協力を得られた園を対象に実施した。アンケートは、全部で園長票、保育士票、子ども票（保育士が回答）、保護者票の4つがある。各調査票の調査票の発送数と回収数は次のとおりである。保育園単位では、調査対象園89園のうち、79園から回答を得た（有効回収率88.8%）。以下、園長票75人（84.3%）、保育士票1,107人（65.5%）、子ども票6,489人（73.0%）、保護者票5,009人（60.5%）

である。本報告では、これら4種類の個票データをマッチングさせて分析した。

(2) 変数

分析に使用した主な変数の作成方法は次のとおりである。

保育士の日常的な保育姿勢：梶田ら（1985）の研究を参考に、保育士たちがふだんどのような姿勢で保育にたずさわっているかを尋ねる20項目の質問を作成した。具体的な質問は「制作や粘土遊びなどで、子どもがうまくできない時は積極的に手助けする」などであり、これらについて「非常にあてはまる」から「全くあてはまらない」までの5件法で回答を求めた。

子どもの自己制御能力：柏木（1988）と吉田・杉原（2002）をもとに、20項目の質問群を作成した。柏木らの研究は幼稚園児対象のものであるため、保育園児について回答可能なように表現を修正した上で使用している。3歳児以上のクラスを担当する保育士が、個々の子どもについて回答した。因子分析（主因子法、バリマックス回転）の結果、固有値1以上の3つの因子が抽出され、それぞれ子どもの「自己抑制力」「自己主張力」「他者支援力」と名づけた。自己抑制力には「ブランコやすべり台などで自分の順番が待てる」など、自己主張力には「友達にいやなことをされたら、「やめて」などと言える」など、他者支援力には「他人のことに気がつき、面倒がみられる」などの項目が含まれている。

子どもの探索行動・言語・生活面の力：津守式の発達指標とKIDSをもとに、探索行動・言語・生活面に関する発達指標を作成した。

その他：統制変数として、子どもの月齢と性別、きょうだいの有無、延長保育利用ダミー、私立保育園ダミー、母親の学歴と職業を使用した。

3. 結果

(1) 保育士の日常的な保育姿勢

保育姿勢についての 20 項目の回答結果を因子分析（主因子法、バリマックス回転）した。その結果、固有値 1 以上で意味的なまとまりのある因子として 3 つが抽出された。因子負荷量の高い方から順に、「積極的な指導」を行う姿勢、「まとまり重視」の姿勢、「介入的対応」の姿勢と名づけた。

「積極的な指導」を行う姿勢とは、子どもたちが他の子どもと同じ経験や遊びをした上で自分の長所をさらに伸ばしたり、互いに仲良く助け合う力を身につけられるように、保育士が積極的に助けていくという姿勢である。具体的な項目としては、「すべての子どもが、他の子どもと同じ経験や遊びをできるように指導する」など 5 項目があげられる。

「まとまり重視」の姿勢とは、集団生活を行う力を身につけさせようとする姿勢である。具体的には、「みんなで遊びやおけいこ事をするとき、集団での活動を守らせる」など 5 項目があげられる。

「介入的対応」の姿勢とは、保育士主導で子ども同士のトラブルを解決したり、遊びを決めていく姿勢である。具体的には、「ケンカが起きたときは、保育士が直ちに入って解決する」など 3 項目があげられる。

これら 3 つの因子に対応する各質問について「非常にあてはまる」(5 点) から「全くあてはまらない」(1 点) までの 5-1 点を与えた上で、因子 1-3 に該当する質問をそれぞれ合計した尺度を作成した。

(2) 保育士の保育姿勢と子どもの発達の関係

保育士の保育姿勢と子どもの自己制御能力、探索行動・言語・生活面の力の関係を分析した。分析方法は、子どもの自己制御能力または探索行動・言語・生活面の力を被説明変数とし、担当クラスの保育士の保育姿勢および統制変数を説明変数とした重回帰分析である。

0-3 歳児の分析

保育士が「積極的な指導」的であるほど、探索行動・言語・生活面の力の発達得点が高くなる。一方、「まとまり重視」であるほど、この発達得点は低い。

「介入的対応」の姿勢が強いほど、発達得点は低くなるが、この効果は 2-3 歳児において有意であった。

3 歳児以上の分析

保育姿勢が 3 歳児以上の自己制御能力（自己抑制力、自己主張力、他者支援力）の発達に与える効果は次のとおりであった。「積極的な指導」的であるほど、自己抑制力と他者支援力は有意に高くなる。「まとまり重視」であるほど、自己抑制力と自己主張力は有意に高くなる。一方、「介入的対応」の姿勢が強いほど、全ての指標は有意に低くなる。

また、保育姿勢が、4 歳以上の探索行動・言語・生活面の力の発達に与える効果についてみると、「まとまり重視」であると有意にこの発達得点が高くなり、「介入的対応」が強いと、この得点は有意に低くなっていた。

4. 考察と結論

保育士の日常的な保育姿勢は、子どものこれらの面の力の発達に強い影響を与えている。保育姿勢が「積極的な指導」的であるほど、子どもの自己制御能力および探索行動・言語・生活面の力を概ね伸長させる効果がみられる。一方、「まとまり重視」の保育姿勢は、低年齢児のうちの探索行動・言語・生活面の力の発達にはマイナスであるが、年齢が高くなると、むしろ発達得点にはプラスの効果がある。低年齢児のうちは集団よりも個人対応、高年齢になると集団的な対応が、子どものこれらの面の力の伸長に寄与していることが推察される。「介入的対応」の姿勢は、ごく低年齢児を除いて、これらの力の伸長にマイナスの影響を及ぼしていることが示唆された。

参考文献

- 梶田正巳・後藤宗理・吉田直子, 1985, 「保育者の「個人レベルの指導論 (PTT)」の研究—幼稚園と保育園の特徴」『名古屋大学教育学部紀要』32: 173-200.
- 柏木恵子, 1988, 『幼児期における「自己」の発達—行動の自己制御機能を中心に』東京大学出版会.
- 吉田伊津美・杉原隆, 2002, 「幼児の運動遊びが有能感および園での行動に及ぼす影響に関する因果モデルの検討」『保育学研究』40 (1): 91-99.